『落窪物語』の離婚事情：継母の三の君と四の君の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5656

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻国文　第44号　二〇一三年三月

『落窪物語』の離婚事情

――継母の三の君と四の君の場合――

倉田　実

はじめに

『落窪物語』は継子虐め譚として理解されており、その主題的展開は「虐待（虐め）」「報復（復讐）」「報恩（孝養）」の三段階になっているとするのも定説である。「報復」「報恩」も、継子虐め譚の発展との理解となる。しかし、これらの展開に結婚や離婚が密接に関連していることは、それほど言及がないようである。ちなみに『日本古典文学研究史大事典』（勉誠出版、一九九七年一一月）の「落窪物語」の項（網谷厚子執筆）を見ると、道頼と落窪君の結婚には触れられていても、その他の人物の結婚等に対する言及は見られない。『落窪物語』が継子虐め譚であることは動かないが、結婚譚・離婚譚として展開している側面を理解することが必要と思われる。この次第を整理すると次のようになる。頁数は新編日本古典文学全集（新全集）を使用し、その始めの箇所を示した。◎印は、各主題の内容であることを示す。人物呼称は「道頼」「落窪君」「中納言」「継母」などで統一した。なお、以下に引用する本文も同書によったが、表記は私に換えた。

虐待

◎蔵人少将と三の君の結婚（巻一・一九頁）→裁縫強要の虐待
帯刀とあこきの結婚（巻一・二一頁）
道頼と落窪君の結婚（巻一・三八頁）
道頼と四の君との縁談（巻一・八〇頁）
弁少将（交野少将）の落窪君への懸想（巻一・九〇頁）
◎典薬助による性的強要（巻一・九八頁）→性的虐待
落窪君の二条邸移徙（巻二・一三七頁）

報復

道頼と四の君との縁談（再）（巻二・一四三頁）
◎面白駒と四の君との結婚（巻二・一五四頁）→四の君・継母の悲嘆
◎三の君の夫蔵人少将の夜離れ（巻二・一六五頁）→三の君・継母の悲嘆
◎蔵人少将と中の君の結婚（巻二・一七九頁）→三の君・継母の悲嘆
道頼と右大臣女との縁談（巻二・一八五頁）
面白駒と四の君の絶縁（巻三・二三七頁）

報恩

蔵人少将（中納言）と三の君の離婚（巻三・二六六頁）
◎四の君の大宰帥との再婚（巻四・三〇五頁）→四の君の幸い

以上のように、結婚・離婚は物語展開と密接に連関しており、主題性そのものとも言えよう。『落窪物語』は、継子虐

め譚に婚姻譚・離婚譚を絡めた物語という面を保持しているのである。この小稿で、これらの内実をすべて扱うことは困難なので、以下は、面白駒と四の君の離婚、蔵人少将と三の君の離婚の二点に絞ってその様相を検討していくことにしたい。なお、『落窪物語』の結婚などについては、高群逸枝[1]・栗原弘[2]・服藤早苗[3]・小嶋菜温子[4]各氏に論がある。

一　面白駒と四の君の離婚

平安貴族においては、女性側が主体となる離婚は、難しかったようである。当時の結婚は、三日夜餅の儀を含む露顕をすることで正式なものとなっていた。この後に結婚を解消しようとすると、それは女側が「捨てられ」たと社会的に認識され、嘲笑の対象となったようである。笑われることを極力忌避したのが平安貴族の生き方であり、露顕後の婚約解消、すなわち離婚は女側で遠慮されたのである。このことは、面白駒（式部少輔）と四の君との結婚で明確に語られている。まず、この点から確認していきたい。露顕の際に、四の君の婿が道頼ではなく、面白駒であったと分かった時の、継母の言にそれが表れている。

(1)　（継母）「おいらかに初めより、かうかうしたりと言はましかば、忍びてもあらましを。露顕をさへして、かくののしりて、我も人もゆゆしき恥を見ること。誰が仲人してしはじめしぞ」（巻二・一六三頁）

結婚四日目の朝、継母が四の君を責め苛む言葉である。一日目に面白駒と分かっていたら結婚は内密（忍び）にできたのに、露顕をしてしまったので、結婚の解消はできず、「ゆゆしき恥」だと言っている。露顕後の離婚が妻側で忌避された事情を示唆していよう。さらに、父中納言も、同じように諫めている。

(2)　少輔、いつとなく臥したりければ、おとど、「いとほし。かれに手洗はせよ。物くれよ。かかる者に捨てられぬと言はむは、また類なくいみじかるべし。宿世やさしもありけむ。今は泣きののしるとも、事のきよまはらばこそあら

め」とのたまへば、北の方、「あたらあが子を、何のよしにてか、さる者にくれては見む」と惑ひたまへば、「あしきことなのたまひそ。かかる者に捨てられぬと言はれむは、いかがいみじかるべき」、北の方「来ずならむ時や、さも思はむ。ただ今は、させまほしくぞある」とのたまへば、未の刻まで人も目見入れねば、少輔苦しうて、出でて往にけり。（巻二・一六三～四頁）

同じく結婚四日目である。いつまでも横臥したままの面白駒に、継母などが手水や粥の面倒をみていないので、父中納言がたしなめている。その中で、婿として待遇しないと、四の君は面白駒から「捨てられ」たことになると言っている。「捨てられ」は二度も言われており、その事態は妻側の恥辱になるとしている。露顕をして結婚が正式なものになると、その解消が困難であったとの理解である。

道頼の「報復」は、露顕で結婚が動かせないものになるという制度的な了解が貴族社会にあったからこそ、効をそうしたのである。単に遅鈍な馬顔の男と契ってしまったという滑稽さだけではなかったのである。面白駒との結婚は、世間的にすぐには解消できないのである。だから、面白駒は、四日目の夜にもきちんと来訪している。

(3)　夜さり来たるに、四の君泣きて、さらに出でたまなねば、おとど腹立ちたまひて、「かくおぼえたまひけむ者をば、何しにかは忍びて呼び寄せたまひし。人の知りぬるからに、かく言ふは、親はらからに、ふたかたに恥を見せたまはむとや」と、添ひゐて責めたまへば、いみじうわびしながら、泣く泣く出でぬ。少輔、泣きたまふを、あやしと思ひけれど、物も言はで臥しぬ。かく、女もわびしと思ひわび、北の方も、取り放ちてむと惑ひたまへど、おとどのかくのたまふにつつみて、出でたまふ夜、出でたまはぬ夜ありけるに、宿世心憂かりけることは、いつしかと、つはりたまへば、「いかで子生ませむと思ふ、少将の君の子は出で来で、この痴れ者のひろごること」とのたまふを、四の君ことわりにて、いかで死なむと思ふ。（巻二・一六四～五頁）

日にちが曖昧になっていく語りだが、四日目の夜以降となろう。面白駒が来ても四の君が御帳に出ようともしないの

で、父中納言は、人に知られてしまった結婚なので、面白駒と同衾しないのは不都合だと責めている。また、継母は面白駒を「取り放ちてむ」と思っても、中納言の諌めによって、それを思いとどまっている。この「取り放ち」は、養子縁組を指す場合もあるが[5]、ここでは妻側からの離婚を含意する語彙であろう。面白駒から娘を放したい、離婚させたいと言う意である。「平安時代の人々が、離婚を、夫を中心にして表現し、妻を中心として表現しなかった」[6]との見解があるが、「取り放ち」を妻側のものとすべきであろう。今となっては、妻側から「取り放ち」する離婚などできないということである。そのために四の君は、御帳に「出でたまふ夜、出でたまはぬ夜」があったとされ、その後にいつしか懐妊したとされている。妻側からの離婚通告は忌避されるのであり、同衾せざるを得ないことになる。だから、懐妊も必然なのであった。

平安貴族の離婚については、高群逸枝によって「うやむや離婚」「無宣言の、自他にもあいまいな、夜がれ的離婚」[7]であったことが指摘されている。露顕で結婚は正式になるものの、離婚は、律令の「戸令」に示される「手書」規定[8]はともかく、文書や口頭などで離婚通知をすることなど普通は行なわれなかった。「戸令」に言う棄妻の条件となる「七出之状」、すなわち「無子、淫泆、不事舅姑、口舌、盗竊、妬忌、悪疾」に該当しない場合は、法的手段が明示されなかったと考えられよう。離婚通知の手段は明確でなかったのである。

また、平安貴族は一夫多妻を現実としていたので、夫が他に妻を儲けても前妻と離婚したかどうかを明確にすることもなかった。すなわち、夜離れがあっても、それが一時的なものか、永続的なものかが明確でなく、離婚の時期が捉えにくい。だから、おおもとは「うやむや離婚」「あいまいな、夜がれ的離婚」ということになる。

しかし『落窪物語』では、離婚の理由や時期をそれなりに語っているようであり、その徴証が認められる。離婚理由は、けっして「うやむや」ではなく、また、男の心変りに原因があったとしても、それにも訳があったのである。さらにこの点を具体的に見ていきたい。

面白駒と四の君の離婚は、高群逸枝の言う「閉め出し」[9]に近い形と見ることができる。「閉め出し」の事例としては、『伊勢物語』二四段のみが参照例となる。

昔、男、片田舎に住みけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみて行きにけるまゝに、三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、今宵逢はむと契りたりけるに、この男、来たりけり。「この戸開けたまへ」と叩きけれど、開けで、歌をなん詠みて出したりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてたゞ今宵こそ新枕すれ

と言ひ出したりければ、

梓弓ま弓つき弓年を経て我がせしがごとうるはしみせよ

と言ひて、去なむとしければ、…（『伊勢物語』二四段）

前半のみ引用した。三年訪れなかった夫が、再婚しようとした女の許に帰って来た時に、女が戸を開けずに新枕することを歌に詠んだという話になる。戸の開閉が、男女関係で意味を持つのであり、閉じたままにすることは拒絶を暗示していた。まさに『伊勢物語』の事例は、「閉め出し」となろう。『落窪物語』の場合は、明確なものではないが、婿として待遇せずに居づらくさせることで、消極的に来ないようにさせる「閉め出し」とみてもいいようである。

(3)の用例にあったように、四の君が御帳に「出でたまはぬ夜」があったということは、同衾拒否によって男に居づらい思いをさせることになる。また、婿に手水や粥を提供しなかったり、誰も顔を出さなかったりすれば、同じように居づらい思いになる。このことは、(2)にあったように、「未の刻まで人も目見入れねば、少輔苦しうて、出でて往にけり」と語られていた。継母たちは、離婚は当面忌避されるものの、意図的に面白駒に居づらい思いを継続させることによって、「閉め出し」を諮っていたことになる。

妻側が「閉め出し」のような算段をしても、面白駒はそれなりに通い続けていた。結婚後に語られる面白駒の様子は、

新全集の年立に拠れば、物語第六年目の中納言が新造した三条邸を道頼が占拠した一件が落着した後になる。

(4) かのいつしか孕みし子は三つにて持たり。父にも似ず、いとをかしげなる女君なりけり。わが身、心憂し、尻になりなむ、と思ひけれど、この児の、いと愛しうおぼえければ、ほだしにて、え思ひ離れであるなりけり。少輔は、いと憎き者に思ひしみて、すげなくのみもてなしければ、来わづらひてなむありける。(巻三・二三七～八頁)

面白駒と四の君との間に生誕した「孕みし子は三つ」になっているという。二人の結婚は、物語第一年目で、先の(3)に拠れば、懐妊は間もなくのことであったと読める。しかし、新全集の年立からすると、結婚四年目にして子どもの誕生ということになる。[10] この本文に拠れば、面白駒は、少なくとも四年近くの間は通い続け、六年たってやっと、四の君たちが「すげなくのみもてなしければ、来わづらひてなむありける」という状態になったことになる。いつもそっけなくもてなしていたので、面白駒はやっと四の君邸に来づらくなっていたのである。あくまでも新全集の現行年立による理解だが、「閉め出し」が効力を持つまでに数年を要したことになる。そして、本文では語られていないが、「閉め出し」が効をそうしても、まだ離婚とはなっていないと考えられよう。語られているのは、面白駒が四の君邸に訪れなくなったということだけなのである。

四の君の面白駒との結婚が成立した時点で離婚が庶幾されたが、その実現はまだ果たされていない。しかし、四の君は、大宰権帥と再婚することになるので、その頃に離婚は暗黙裡に成立し、再婚が可能となっていたことになる。時間的には、面白駒が来づらくなったとされた年から、再婚が認められるとする「三年」が経過してからと考えるより他に方途はない。したがって、物語第九年目の時点で離婚が成立したことになる。新全集年立では、再婚時が第九年目になる(年立が曖昧な巻四からすると第十二年目)。したがって、四の君の再婚がなされた時点では、妻側で面白駒とのことは何の問題にもならなかったわけである。

(5) 面白の駒に、いふかひなく笑はれ、謗られたまひしを、これにて恥隠したまへと、しか思したるなめり。(巻四・

三〇七頁）

四の君に再婚話があることを落窪君から聞かされた少将（中納言の三郎君）が、継母に報告する言葉の一節である。面白駒と結婚した恥を、大宰権帥との再婚で隠せると判断しているようだと話している。再婚が「報恩」と連関するわけである。再婚が不可能なのであれば、そもそもは縁談など起こらない。多夫一妻はあり得ない。面白駒との結婚は、居づらくさせる「閉め出し」によって、やっと解消されていたことが確認できる。

しかし、解消は妻側の判断であって、夫側がどう考えるかは別である。『伊勢物語』二四段でも、三年連絡もしなかった夫が妻のもとに戻っている。三年は、離婚が正式に認められるということではなく、妻に再婚する権利が生じるということであろう。夫が三年を過ぎても離婚を念じていなければ、結婚が継続していると信じる場合もあったことになる。『伊勢物語』で三年たって妻のもとに帰ったのは、このことになる。だから「あいまいな離婚」ということになる。

それでは面白駒は、どうであったか。面白駒は、四の君の再婚後の筑紫下向に際して、離婚を承認したと言えるようである。面白駒は、餞別の品の州浜に付けて、歌を贈っている。

(6)「今はとて島漕ぎ離れゆく舟に領巾振る袖を見るぞ悲しき
聞こゆるからに人わろし。よしよし聞えじ」と書きたり。面白の駒の手なれば、覚えなくあさまし。（巻四・三一一頁）

贈物も歌も、面白駒の妹たちの算段のようだが、歌は面白駒の筆跡と見られている。歌の内容を知らずに面白駒が書き写した可能性があるが、この歌が離婚通知・離婚証明となることは確かである。歌は、「今はこれでお別れだといって島を漕ぎ離れて行く舟に、領巾を振って別れを告げる袖を見るのはとても悲しいことだ」としている。これは、松浦佐用姫伝説によった、「海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫」（『万葉集』巻五・八七四旧）によっており、「帰れ」という願いが含意されていよう。未練を残しつつ、別れを詠んでいる。しかし、その未練も今となっては甲斐もない。だから、「聞こゆるからに人わろし」と追書されている。未練があるように申し上げるのも世間体が悪いことですと言うわ

けである。だから、さらに「よしよし聞えじ」と続けている。もう何も申し上げはしまいとの決意である。四の君とは、これで完全にお別れだということになる。単なる未練を儀礼的に詠み贈ったのではなく、離婚を承諾した意が、この歌に込められたのである。四の君は、これで完全に面白駒と縁が切れたことになる。この歌が離婚を証明する文書となったのである。

以上が、面白駒と四の君との離婚に到る経緯になる。『落窪物語』は、当時の婚姻慣習を順守しながら、滑稽な物語を創出していた。妻側で露顕後の離婚が忌避されたものの、消極的な「閉め出し」を諮ることによって、三年の不訪を待ち、実行されたと言えよう。そして、離婚は、再婚で明確になるという道筋を語っていたことになる。「あいまい」「うやむや」は、妻の再婚で消失したのである。

二　蔵人少将と三の君の離婚

蔵人少将が主体となった離婚劇も、「復讐」の一環であった。離婚によって嘆き苦しむ三の君や継母を語ることがその主題性を持つからである。そして、離婚に到る経緯もきちんと語られていると見られよう。この経緯も、「あいまいな離婚」となるが、蔵人少将には離婚したい理由がはっきりと語られている。まずはこの次第を追っていきたい。

一点目の理由は、面白駒と「相婿」になることを嫌ったからである。当時の貴族社会では、身分が違うのに相婿となるのを嫌うことがあった。このことは、『落窪物語』でも語られている。落窪君のもとに男（道頼）がいることを覗き見した継母は、帯刀が蔵人少将の所で落とした落窪君の文を証拠として、仲を裂こうと中納言に讒言する段である。

① 「この蔵人の少将の方なる小帯刀といふは、この月ごろあこきに住むと聞き、思ひつるは、はやう正身に立ちかかりにけり。文の返事を、痴れたる者にて、懐に入れて持たりけるを、この少将の君の前に落したりければ、見つけた

まひて、くはしき心つきたる君にて、『誰がぞ』と帯刀に問ひ責めたまひければ、隠さで、『しかじか』と申しければ、『いと清げなる相婿とりたまひてけりな。あな名立たし。人の見聞かむもいといみじ。これな住ませたまひそ』と、いと恥づかしげにのたまひける」と、くはしく申したまひてければ、（巻一・一〇〇頁）

継母は、落窪君が帯刀と通じているとして、それを知った婿の蔵人少将の言を捏造している。蔵人少将は、「実にこざっぱりとした相婿を迎え取りなさったね。ああ外聞が悪い。他人が見聞きするのも実につらい。帯刀をここに住ませないで欲しい」と継母に言ったとしている。三の君と落窪君は姉妹（異母）なので、蔵人少将と身分違いで小男の帯刀とは相婿となる。蔵人少将は、それを嫌っていると継母は捏造したのである。身分違いの相婿は、世間の話題となるので避けられた事情を示している。

そして、捏造された蔵人少将の思いは、皮肉にも面白駒と相婿になることで実現してしまうことになる。「虐待」の理由とされた相婿のことが、今度は「復讐」に転じたのである。蔵人少将は、面白駒と相婿になったと知った露顕の日に、そのことを難じている。

② 蔵人の少将の君、「世に人こそ多かれ、かかる面白の駒をば、いかで引き寄せたまひしぞ。いといふかひなかりけるわざかな」と、「かかる者と出で入りせむこそわびしけれ。殿上の駒とつけて、頭もえさし出でぬ痴者の、いかで寄り来にけむ。そこたちの見はかりてしたまへるならむ」とて笑ひ、嘲弄したまへば、三の君、さらに知らぬよしを、いとほしがり嘆きたまふ。（巻二・一六二頁）

蔵人少将は、面白駒のような者と「出で入りせむ」こと、すなわち中納言邸で相婿になってしまったことを嘆じている。面白駒は、帯刀の比ではない負性の持ち主である。物語は、蔵人少将の「嘲弄」を当然のごとくであるかのように語っている。相婿となるのは、左大将男の道頼になると思っていたのに、出て来たのは面白駒なのであった。これ以前、蔵人少将は、道頼と相婿になることを喜んでいた。

③　御婿の少将、「誰を取りたまふぞ」と問ひければ、「左大将殿の左近の少将殿とかのたまへば」「いとをかしき君ぞかし。うち語らひて出で入りせむに、いとよきことかな」と許しければ、北の方、栄えありてうれしと思ふ。（巻二・一四七頁）

四の君の縁談を知った蔵人少将の反応である。蔵人少将は、道頼と相婿になることを聞いて喜び、中納言邸に「出で入りせむ」ことを楽しみにしていた。しかし、それが裏切られたのである。そして、宮中でも、面白駒と相婿になったことを皮肉られることになる。

④　蔵人の少将、思ひしもしるく、殿上の君達、「面白の駒はいかに。このごろ年返らば、御ひきにて白馬に出だしたまへ。君とあれと、いづれをか思ひましたる」とて笑ふに、塵もつかじと思ふ心に、いと苦しとおぼゆ。（巻二・一六五頁）

清涼殿の殿上の間でのことになる。蔵人少将は、面白駒と相婿になる故に、どちらが中納言邸で大事にされるのかとからかわれたのであり、それが苦痛なのである。そして、このことは三の君との離婚を決意することに直接している。

⑤　もとよりも、いと思ふやうにはおぼえざりしかど、いみじういたはらるるに、かかりてありつるを、これにことづけて、捨てむと思ひなりて、やうやう来ぬ夜のみ多かれば、三の君、物思す。（巻二・一六五頁）

蔵人少将は、面白駒と相婿になったことを口実にして、「捨てむ」と決心し、夜離れを重ねることが多くなったという。一夜、二夜ではなく、永続的な夜離れをすることで、おのずと離婚となるようにしたのである。すなわち、「無宣言の」「あいまいな、夜がれ的離婚」の方途を選択したことになる。そして、離婚のさらなる理由もここに示唆されている。

離婚の次の理由は、「もとよりも、いと思ふやうにはおぼえざりしかど」とあるように、三の君は蔵人少将が望んでいたような妻とは思えなかったということである。具体的には、三の君が裁縫を苦手にしていたことが主要な要素となっている。

⑥　蔵人の少将の君も、御衣どもわろしとて、出づと入ると、むつかりて、着たまはずなどある時は、わびしうて、ものせむ人もがなとて、ここかしこ手を分ちて求めたまふ。（巻二・一四七頁）

⑦　中将（道頼）かく言ふを、見るやうぞあらむとて、時々返りごとせさせたまふに頼みをかけて、三の君をただ離れに離れゆく。よしと誉めし装束も、すぢかひ、あやしげにし出づれば、いとどことをつけて、腹を立ちて、しかける衣どもも捨て、「こは何わざしたるぞ。いとよく縫ひし人は、いづち往にしぞ」と腹立てば、（巻二・一六九頁）

二例とも落窪君が居なくなって以降の、衣装の仕立て悪さを蔵人少将が「むつかり」「腹立ち」する様子である。⑦には、わざと腹立ちをして、三の君を追い詰め、離婚を納得させようとする算段も認められる。この時点で、道頼妹の中の君との縁談が進行しているので、ますます腹立ちの度合を強めている。裁縫もできず、思うような妻とは言えないので、身勝手に離婚を念じるのである。衣装調達の上手下手が、「虐待」「報復」と絡んでいるのである。そして、この⑦には、三点目の離婚したい理由が示されている。

三点目の理由は、左大将家の婿となるためである。⑦には、縁談に頼みをかけて、「三の君をただ離れに離れゆく」と示されていた。中納言家を当てにしなくても、左大将家の婿になれば、三の君との結婚を継続する理由がなくなるのである。三の君は思うような妻ではない。左大将家の婿のほうがいいのである。そして、婿になってからは、道頼から次のように釘を刺されている。

⑧　中将（道頼）、いと思ふやうにしつと思ひて、少将に会ひて、「いと恐ろしき人持たまへりと、おぢきこえたまへしかど、間近くて聞こえ語らはむの本意ありてなむ、しひてそそのかしきこえたるを、わりなくとも、ゆめ、もと一つに思すな」と聞こえたまへば、少将、「あなゆゆし。よし、聞きたまへ。文をだにものしはべりてむや。御用意ありと承りしよりなむ、限りなく頼みきこえし」とのたまひて、げに顧みもしたまふべくもあらず。おぼえも、女君も、こよなくまさりたれば、何しにかは通はむ。（巻二・一八〇頁）

道頼は、妹との結婚は、自分から勧めたとしたうえで、「ゆめ、もと一つに思すな」と蔵人少将に命じている。やや難解だが、ここは「けっして、中の君を、もとの三の君と一緒に思ってくれるな」という意であろう。すなわち、暗に三の君と離婚せよと言っているのである。それが「報復」になるからである。左大将家に頼みをかけたい蔵人少将は、それを受けて、文さえ出すことはないと明言し、実際に「顧みもしたまふべくもあらず」「何しにかは通はむ」というようになったとされている。蔵人少将としては、道頼から釘を刺されたことで離婚をはっきり決意したのである。離婚理由を「夫が新妻と結婚したから」[11]と簡潔にまとめるのは、物語として厳密な理解ではないことになる。左大将家の婿となったからであり、その他の理由として、相婿・衣装の仕立て方などにもあったことを確認しておきたい。

蔵人少将としては、左大将家の婿となった時点で三の君との離婚を最終的に決意したことになるが、そのことを中納言家に通告することはない。前節の四の君の場合と同じように、一夫多妻が現実なので、三の君としてはまだ婚姻関係は継続しているものと思念されている。道頼が、「ゆめ、もと一つに思すな」と釘を刺したのも、三の君との婚姻関係が継続することを前提にしてのものであった。

以上の三点が、蔵人少将の離婚したいとする理由なのであった。物語では、離婚理由を曖昧にすることなく、それなりに語っているのである。続いて、妻方となる三の君は様子を追っていきたい。

蔵人少将と中の君との結婚は、中納言家にすぐに知られるが、それを三の君が離婚されたと理解することはない。

⑨　中納言殿に聞こえて、焦られ、死ぬばかり思ふ。かくせむとて、我をばすかしおきにこそありけれとて、いかでか、いきすだまにも入りにしがなとて、手がらみをし、入りたまふ。（巻二・一七九頁）

蔵人少将と中の君との結婚を知った継母の反応である。この結婚自体は、中納言家にとって不都合なので、「焦られ、死ぬばかり思ふ」ことになるが、三の君が離婚されたとの意識は認められない。この結婚を諮った道頼に、生霊となって祟りたいと念じるだけであり、蔵人少将への矛先は語られていない。蔵人少将が他に妻を儲けても、三の君との離婚に直

接結びつかないからである。だから、中納言家では、蔵人少将の訪れをまだ期待している。

⑩　中納言殿は、かく少将なりあがりたまふにつけても、三の君、北の方、「などか、名残ありてだに、時々来まじき」と、いみじくねためども、かひあるべくもあらず。（巻二・二〇一頁）

道頼が中納言兼衛門督に昇進し、蔵人少将が宰相中将になった時の中納言家の反応である。三の君や継母は、「などか、名残ありてだに、時々来まじき」と妬んでいる。愛情の名残で、時々でも訪れてはくれないのかと思うのである。昇進すれば、慶申に訪れてくれてもいいのではないか、ということにもなる。蔵人少将（宰相中将）は、まだ三の君の夫だからである。

⑪　はらからの君達、あさましと思ふ中に、三の君は、わが夫取りたる人の類なれば、近うて聞き通はむを、ねたしと思ふ。四の君は、我をはかりて、かう憂き身になしたる君なれば、こと人よりも、見むにつけて、いみじく心憂かるべきを思ふ。（巻三・二三七頁）

道頼の三条邸占拠の一件が済んで、その妻が落窪君と知った際の反応である。道頼は、三の君にとって「わが夫取りたる人の類」であり、四の君には「我をはかりて、かう憂き身になしたる君」である。道頼の「報復」手段が、歓迎されない結婚であったことを語っている。ここで三の君は、蔵人少将（宰相中将）を「わが夫」としている。他の女性に取られたとしても「わが夫」なのである。未練はぬぐい切れず、結婚継続がまだ念じられている。蔵人少将を「夫」とする語りは、後にも認められる。

⑫　御弟の宰相中将、三の君の夫の中納言、いと清げにさうぞきつつ、参りたまへり。三の君、中納言を見るに、絶えたりし昔思ひ出でられて、いと悲しうて、目をつけて見れば、装束よりはじめて、いと清げにてゐたるを見るに、いと憂くつらし。（巻三・二六〇頁）

物語は「報恩」の段階になっており、道頼が岳父中納言のために、その邸で法華八講を催す段である。蔵人少将は、宰

相中将から中納言に昇進している。八講に参列するために参上した蔵人少将（中納言）などに、三の君は視線を注いでいる。その視線は、未練と悲傷に縁どられて、憂愁の念となっている。ここで「三の君の夫の中納言」としているのは語り手になるが、それは三の君の心内に立ち入ってのものであろう。その着飾った姿を見るにつけ「絶えたりし昔」以前の夫婦生活が思い出されている。未練である。蔵人少将（中納言）との関係は「絶え」と認識しても、まだ「夫」だからである。そして、八講最後の日に、三の君は、はっきりと離婚されたことを観念することになる。

⑬　三の君、中納言を今日や今日やと思ひ出でたまふに、さもあらでやみぬ。いみじう心憂しと思ひ出づる魂や、行きてそそのかしけむ、事果てて出でたまふに、しばし立ちとまりて、左衛門佐（三郎君）のあるを呼びたまひて、「などか疎くは見る」とのたまへば、佐、「などてかむつましからむ」といらふれば、「昔は忘れにたるか。いかにぞ。おはすや」とのたまへば、「誰」と聞こゆれば、「誰をか我は聞こえむ。三の君と聞こえしよ」とのたまへば、「知らず。侍りやすらむ」といらふれば、「かく聞えよ。

いにしへにたがはぬ君が宿見れば恋しきこともかはらざりけり

とぞ。世の中は」と言ひて、出でたまへば、佐の、返事をだに聞かむと思せかしと、名残なくもある御心かなと見る。入りて、「かうかうのたまひて、出でたまひぬ」と語れば、三の君、しばし立ちどまりたまへかし、なかなか何しに音づれたまひつらむ、いと心憂しと思ひて、返事言ふべきにもあらねば、さてやみぬ。（巻三・二六六～七頁）

三の君は、法華八講の九日間、「今日や今日や」と蔵人少将（中納言）が訪れてくれないかと念じていたが、そうもならずに、終わってしまったとされる。首尾に二例ある「やみぬ」は互いに照応しており、完全に縁が切れたことを言っている。関係の最後に、その辛さを思う魂は生霊となって蔵人少将（中納言）をそそのかし、歌を詠ませたことになる。

歌は、三の君の家を見ると恋しさは昔のままと変わらないとしている。しかし、歌のあとの「世の中は」は、「世の中はいづれか指して我がならむ行きとまるをぞ宿と定むる」（『古今集』雑下・九八七・よみ人知らず）に拠っていよう。そ

うすると、新全集頭注が指摘するように、「今は行きとまる所、つまり中の君がいるのでそれを妻とするという意で、三の君を拒絶している」ことになる。蔵人少将（中納言）は、三の君の家への恋しさを詠みつつ、三の君を拒絶して、離婚を通知したことになる。歌は、左衛門佐を通じて三の君に伝えられている。「無宣言」のやり方ではなく、歌でもって通知したのである。その返事は不要なので、蔵人少将（中納言）は受け取ることなく帰宅し、三の君もそのような歌に返歌するまでもないので、歌を詠まずに終わっている。蔵人少将と三の君との離婚は、「夫が来室してこなかったことによって、妻方は離婚の確定を余儀なくされた」[12]のではなく、男から歌で通告され、女はそれを理解した事例として語られたことになる。したがって、「以上の場面は中納言と三の君との関係が離婚状態から離婚の確認へ進み、完全に切れたことを示す」[13]ことになるが、「場面」というよりも、やはり歌による通知とみるべきであろう。

おわりに

以上で、『落窪物語』に見られる二つの離婚劇を検討したことになる。継母の女子二人に離婚を強いたのは、道頼の「復讐」の一端として構成されたのであった。離婚そのものは、高群がいうように「あいまいな、夜がれ的離婚」を基本としており、その継続で、離婚が観念されていたが、『落窪物語』では、それなりに決着を諮っていたことになる。その次第が認められれば、そこに先行研究と拙論との差異があることになる。さらに、離婚事例を検討し、また、『落窪物語』に見られる結婚事例も扱わなくてはならないが、それらは後の課題とすることで、ひとまず筆を擱くことにしたい。

注

（1）　高群逸枝『招請婚の研究』（講談社、一九五三年月）。本稿では、『高群逸枝全集　二巻　招請婚の研究一』（理論社、一九六六

年三月）を使用する。

（2）栗原弘「『落窪物語』における家族形態について」（『文化史学』41、一九八五年一一月）

（3）服藤早苗「『落窪物語』にみる婚姻儀礼」（『埼玉学園大学紀要（人間学部篇）』6、二〇〇六年一二月）

（4）小嶋菜温子「生誕・裳着・結婚・算賀―『落窪物語』の〈家〉と〈血〉―」（『源氏物語の性と生誕』立教大学出版会、二〇〇四年三月）、同「王朝の家と鏡―かぐや姫・落窪の姫君の結婚から」（服藤早苗編『女と子どもの王朝史』森話社、二〇〇七年四月）

（5）拙著『王朝摂関期の養女たち』（翰林書房、二〇〇三年一一月）。四七頁。

（6）栗原弘『平安時代の離婚の研究』（弘文堂、一九九九年九月）。三二頁。

（7）注（1）に同じ。三二五・五八九頁。

（8）「戸令」には「凡棄レ妻、須レ有二七出之状一。…皆夫手書棄之。与二尊属近親一同署。若不レ解レ書、画レ指為レ記」（思想大系）とあり、「棄妻」する際には「手書」が必要とされたが、空文化していた。

（9）注（1）に同じ。三三二頁。

（10）巻四の年立は、巻三までの記述とは相違し、四の君の子は、「この北の方（四の君）、（落窪君より）三が妹にて、二十五になむおはしける。面白の駒は、十四にて婿取りて、十五にて子生みたまへりける」（巻四・三一一頁）となっている。子の誕生に関しては、巻四のほうが説得的にはなる。

（11）注（6）に同じ。一三九頁。

（12）注（6）に同じ。二四四頁。

（13）新日本古典文学大系『落窪物語　住吉物語』（岩波書店、一九八九年五月）の二二九頁脚注一四（藤井貞和校注）。